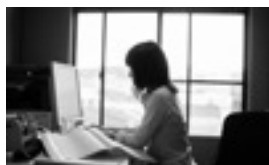


3階ラボが 業務縮小

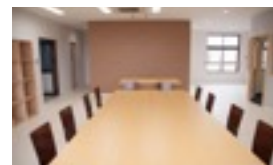
制度の狭間で苦しむ
計画相談の実態を報告



DENMARK REPORT
デンマーク視察報告



下鶴さんの思い出
3階ラボを卒業



日々、雑感。
障害者の就労支援

LABONIEK!



DENMARK Report 2016

2016年も6泊8日のデンマーク視察研修に参加しました。2年連続で私を視察研修に送り出して頂いた法人に対して、私は、何を見て、感じ、持ち帰るのか？個人的には強いプレッシャーを感じながらの視察となりましたが、昨年とはまったく違う視察内容に、いろんなことを考えた8日間となりました。「デンマークは何か特別なことをしているのではない。人は国家の宝として、人の良心を信じて、その人のためになることをひたむきに行っている。その結果が、誰もが生きやすい世の中にしてい

Libero purus
sodales mauris, eu
vehicula lectus velit
nec velit. Nulla
nunc lectus.
Aliquam rhoncus
mattis felis. Feugiat
elit pede et wisi

る。」私は視察のなかでそう確信しました。これまでの私は、障害福祉を担うひとりとして、これまで業務に従事してきました。要は「障害」というくくりで物事をみてきたわけですが、デンマークにいくと、「支援が必要な人」であるという事実でしかないことに気付かされます。支援が必要なのは、障害だけではありません。例えば、経済的に支援が必要なことは、障害に限ったことではないのです。病気、障害、ひとり親、多子、失業、加齢、介護、看病、、、理由はさておき必要だから支援をする。だから、デンマークには障害年金もなければ、障害者数を把握することもないのです（もちろん、支援を受けている人数は把握していますよ！）。なので、もし私が、デンマーク視察研修で「障害福祉」だけを視察したところで、なんの意味もなさないことがご理解いただけると思います。デンマークは、幼児保育、教育、行政、歴史、福祉、介護まで、すべてを見ないと、本当の姿は見えてこないのです。また、「療育」ということばに翻弄される日本人ですが、デンマークに「療育」ということばはあまり耳にすることはありませんでした。療育はなぜ必要なのでしょう？私は、もしかしたら「療育を受け、能力を最大限に引き出して、社会においてできることを増やさない生きずらい社会である」ということではないか？と思うようになりました。デンマークのように、「18歳になれば、望む誰もが自立した生活を送ることができる。」というルールがあれば、将来、そのために必要な支援を受けて、自立することができるので、親は大きな将来の負担を感じることはありません。そんな不安を感じることがない（＝安心できる）社会があるからこそ、障害をもつ人が街に当たり前のようについて、当然のこととして生きていけるのだと思うのです。そして、理由がが、障害であれ、ひとり親であれ、多子であれ、失業であれなんであれ、デンマークの人にとっては、変わらないのです。最近、「こども食堂」が日本でも取りだたされていますが、「こども食堂」が必要な社会で、誰が障害や貧困、失業や多子など「他者への理解」を促すことができるだろうか？ということです。福祉はコストという考え方がありますが、デンマークはこれだけ社会福祉にお金をかけていますが、経済成長している国であることを忘れてはいけません。福祉は、コストではなく「未来への投資」なのです！

“グローバルな世界において、答えが一つしかないということはありません。”



デンマークを視察すると、日本の民主主義がどれだけ遅れているかがよく理解できます。「多数決は多数派による独裁だ」とはっきり口にするデンマークの人々。政治は、少数の意見をどれだけ反映させて、みんなを納得させる方法を見出せるかが大切と言われます。議論が苦手な日本人ですが、議論をしていくことの大切さを改めて学びました。

3階ラボは業務縮小へ。計画相談の未来は？

平成26年12月よりスタートした3階ラボですが、平成27年12月より新規の受け入れを停止、そして、これまで相談支援専門員2名体制で業務を行ってきましたが、平成28年11月より、相談支援専門員1名体制への業務縮小となりました。それに伴い、これまでご登録頂いていた利用者様には、他の事業所への移動をお願いすることとなりました。突然のことで、皆様には多大なるご心配をおかけしたことを重ねてお詫び申し上げますとともに、ご理解ご協力のほどよろしくお願いいたします。

福岡県の計画相談導入率は、本格始動した平成27年4月の段階では、全国最下位であったことは周知の事実です。そのため、私たち3階ラボも、筑紫地区でその時にすでに設立していた数少ない「計画相談支援事業所」として、ものすごい数の新規利用者が殺到し、当時を振り返ってもひたすら訪問して、お話しを伺い、書類を作成する毎日でした。多い時は月40数件の新規を受け入れたこともありましたが、もちろん、当時からそれだけの人数を受け入れることが先々、自分たちの破綻につながるということは十分理解していました。しかし、毎日、利用者さんより「どこにも受けてもらえないのです！」と悲鳴のような電話がかかってくれば、頭では無理とわかっていても受けつけてざるを得ませんでした。最近になって、これら一連のことを知らない事業所から、対応の遅れからクレームのような発言を受けることもあります。結果的には、自前で蒔いた種とも言えるかもしれませんが、3階ラボも、相手に失礼がないぎりぎりまでの簡素化、簡略化を行うことで、なんとか維持してきましたが、現状の制度では、計画相談を黒字化するのは極めて困難であるために、知らず知らずのうちに法人にも負担になっていたのだと思っています。

当法人は、私個人的には、理解のある法人だと思っています。しかし、障害福祉の通所サービスを主体としている所属法人にとって、利用者さんの増減が激しい事業を行っているわけですから、経営面でも安定するためにはそれぞれの部署が一生懸命努力しているわけです。そのなかで、安定して？赤字を生み出す事業所があることは、やはり、中長期的にみて経営的にも困難が伴うことは、私個人でも十分理解できます。加えて、すべての事業の利用定員を合わせても、40名程度である当法人ですが、計画相談事業だけで登録者数350名/2名を抱えるわけですから、時間の経過とともに、その責任の重さは増すばかりと言えるでしょう。

計画相談は、受給者証の更新のお手伝いをするだけの事業ではありません。今後、直面するかもしれない問題に対して、気軽に相談できる身近な場所としての役割の方が大きいのです。「急に親が病気になって、突如ひとりで生活しなければならなくなりました。」「大黒柱であるお父様が病気になり、私がお仕事に行くことになったので、障害をもつ子を預かってくれる場が欲しい。」「病院を退院したばかりで、ひとりで生活するのが不安。」など、長く付き合いがでくると、いろんな問題に直面することが増えてきます。そんな問題を一緒に考えながら、適切な場所におつなぎするのも私たちの役目なのです。しかし、この筑紫地区は、一般の相談支援事業所や基幹相談支援事業所がないために、「おつなぎする場」もない状況なのです。であるならば、

私たちが主体となって解決しなければならないこともしばしば。結果的に、そうやって動く時間に対しては、現行制度だとなんの給付もないのが実情です。現在の相談支援体制は、事業所や相談支援専門員の福祉や利用者さんに対する想いで成立しているといっても過言ではありません。だからこそ、時間の経過とともに、法人も、その責任の重さから計画相談を維持していく自信を失っていくのだと思います。

また、計画相談支援事業所もそういった状況を逆手にとって、ある意味「忙しい」を理由に適当に処理をしてきた事実もあります。一時は、障害福祉サービス事業所からも「計画相談不要論」もでていた福岡地区ですが、そのこと自体も、「身から出た錆」ともいえます。自らが適切な処理をする事業所になることで、結果的には自らの首を絞めることになったのです。こんな計画相談の現状がみられるこの地区で、「事業所がない！」という理由で同様の事業所を利用せざるを得ない方々のことを思うと、本当に申し訳ないという気持ちになってしまいます。私個人の意見として、制度がどのように変わっていくかにかかわらず、この計画相談の本来の意味と役割を考えると、事業所にとってはとても大きな負担になることは間違いないのです。だからこそ、業務縮小を決断した法人を責める気には到底なれないのです。

そんななかで、私たち3階ラボの未来がどうなっていくのか？ということ、私自身も真剣に考えていく必要がでてきました。このまま、この状況を維持するのか？今後も縮小を図りながら、最終的には廃止に向かうのか？縮小しながらも、別の事業体が変わっていくのか？今のこの現状では、みなさまにお話できることはなにひとつありませんが、とにかく今のままでは、将来は見えないとしかいえません。ただし、目の前にいる利用者さんのことは、第一に考えていかなければなりません。どういった形であれ、私は、利用されているみなさまに安心を届けるのが大きな役割だと思っています。私自身、何かができるわけではないですが、「なんか会ってお話すると元気になる。」「なんとなく将来が安心できる。」そう言っていただけたら幸いです。ですので、今後、3階ラボがどのようにかわっていくとも、みなさまにはご心配をおかけしないようにしていきたいと思っていますので、今後ともご協力のほどよろしくお願いいたします。



お疲れ様でした

設立当初の混乱期から3階ラボを支えてくれた相談支援専門員の下鶴が、平成28年11月をもって部署移動となりました。約100名の利用者をひとりて抱えて、さらには、私のサポートもしながらの大変な業務だったと思いますが、「これで本当に良かったのか？」と常に自分と向き合いながら、議論をしながら一緒にやってきました。私自身にとってもとても心強い存在でしたし、何より利用者さんに好かれる存在でした。去年は結婚して、西山となりましたが、今後も、同法人の別の事業部で大きな役割を果たしてくれると思っています。本当にお疲れ様でした！

日々、雑感。

障害者の雇用人数がアップしているようです。それに伴い、就労に向けた基礎訓練の必要性が言われるようになってきました。「学校での就労訓練は目を覆うものばかり。」との声を利用者の保護者からや、実習を受け入れる事業所さんを通して耳にすることがあります。就職することの大変さを痛感している事業所さんならではの悩みも聞きます。例えば、「実習中はしっかりと教えるので、徐々に本人の意識が変わってきているのがわかる。でも、学校に戻ると、すべてリセットされてしまう。」というような声。社会に適応できるように支援をしていかなければならないのに、社会性のない人たちが本人に就労について教えている現状・・・など？その根本的な部分には、こどもたちにとっての「今」に関わっていることへの畏怖の念に乏しいことが問題なのかもしれません。

話は大きく逸れますが、最近、私たち計画相談に学校の先生への対応を相談されることも増えてきました。ちなみに、私と先生はなんの接点もありませんので、正直、よくわからないのですが、どうも話を聞いていると、お互いがお互いをけん制しあっているような印象を受けます。先生は、常に責任回避のような発言だったり、お母様も感情的で少し被害的だったり。だから、お母様には「相手はこういう人だ！という先入観をすてて、まずは先生がなにを考えて言われているのかをきちんと聞いてきてください。」と言うようにしています。先生が言いたいことをじっくり聞くと、「ああ、そういうことだったのか。」と思えることもしばしばなのですが、先生も、もっときちんと伝えればいいのに、焦りからか端折りすぎて別の意味で捉えられてもおかしくないような伝わり方になっていることもあります。お互いに主張をぶつけ合うのですから仕方ないとも思いますが、もう少し冷静に対応してもらえたら良いのですが。

話を戻しますが、障害者を雇う（雇わないいけない？）企業が増えるなか、やはり、仕事をきちんと理解して真剣に取り組んでくれる人材が求められるようになります。しかし、学校を卒業しても、こどもたちはなかなかそういった社会への意識に乏しいのが現状です。そんな中、最近、あらたに注目されているのが「就労移行支援」ではないでしょうか？就労移行支援とは、2年間（最大3年）という期限を設定して、就労に向けた訓練を行う福祉サービスです。ですので、貴重な2年間を利用して、しっかりと社会に向けた訓練を行うことができるのです。しかし、その期間は工賃が出ないので、保護者としてはこれまで避ける傾向にあったのですが、最近、A型の現状と一般雇用の意識の高まりから、少しずつ見直されつつあるようにも思います。当法人にも「就労移行支援事業所 ディアディア」がありますが、那珂川町で本格的に移行支援を行なっている唯一の場として、最近問い合わせも増えています。他にも、春日や大野城の移行支援にも、お問い合わせが増えているとのことで、個人的にはとても良い傾向だなと感じています。ただし、就労移行支援も様々です。A型事業の待機場所的な移行支援も存在しますので、きちんと見学して、事業所の話聞いて、雰囲気確かめてからの利用をお勧めします。移行支援の目的は、2年後の就職に向けて見据えた支援です。工賃や給与をもらう事業所ではないことをお忘れなく。

放課後等デイサービスでの「療育」とは何か？

誤解のないようにお伝えしたいのですが、私は「療育否定論者」ではありません。ただし、よく「最近の放課後等デイサービスは、療育をわかっていない」と言う、学校の先生や保護者、療育センターの安易な発言も少し気になっています。だいたい、そういうことを口にする方に限って、療育という名を使って、本人（こども）との関係性をごまかそうとする人が少なからずいるからです。放課後等デイサービスで、療育的なこと、例えばカードといった器具をつかった訓練を行うことをすれば療育なのか？ということ。私はそれについては、NO!と言いたい。

放課後の限られた時間でできることは、社会性を学ぶことです。人との関係性やルール、マナー。本人とスタッフとの関係性（信頼）を築き、本人が本音でスタッフに接してくれて、その中で本人の思いや考えを汲み取り、情緒的な関わりをもつこと。そういったおとなや社会への安心感を育みながら、来たるべき将来に安心して社会に送り出すこと。そのことこそが大切であると思うのです。なので、私は「うちではあれをしています」「これをしています」という宣伝文句のような内容はあまり重要視しません。むしろ、本当にこどもたちのことを考えている事業所は、療育的スキルよりも、こどもたちとの関係性、特に信頼関係、そして、なによりこどもたちの特性や変化をたくさん引き出して私たちに教えてくれます。その結果、「この事業所から自宅に帰ってきたときは、自宅ではパニックをおこさなくなった！」や、「自宅にかえってから、こんなことを自らするようになった！」といった声が聞こえてくるのです。これが、本来の意味での療育の結果ではないでしょうか？計画相談をしていると、何をどう言われなくても、そこが良い事業所かどうかはわかります。黙っていても、こどもさんや保護者を通して見えてくるのです。

療育ということばは、諸刃の剣のようなものです。保護者に対して安心を与えることもあれば、不安を与えることもあります。療育をしておけば安心というわけでもなく、療育をしていないから不安というわけでもないのです。こどもが楽しく、そして自分のことは自分で決めて、おとなや社会に対して安心感をもてる。そういうことが大事であって、療育という手段が大切であるのではないということ。よく聞きます。療育ということばを借りて、こどもたちに対して上から高圧的に注意をするスタッフ。スタッフが原因をつくっておきながら、こどもがパニックになると、連絡帳に「今日も急にパニックになりました。ご家庭でも様子を見ていてください。」などと平気で書くスタッフ（笑）そんな事業所で、「こんな療育しています！」などと言われても、、、ですね。やはり、あたたかい笑顔。穏やかな接し方。まずは耳を傾ける。目線を合わせて、本人に寄り添ってくれる。ことばではない、雰囲気の話ができる。そんな、先生やスタッフが増えたといいなと思います。

もしかしたら、こどもたちは「学校」という名の戦場で（笑）、一生懸命努力したり我慢したりして、放課後等デイサービスに来るのかもしれませんが。放課後等デイサービスが、学校みたいだったら、、、それはこどもたちにとって過酷かもしれません。もっと細やかに、もっと穏やかに。やさしい、でもきっちりとしたデイサービスが増えるといいなと思う今日この頃です。

編集後記

少し弱音を吐くと、本厄だった昨年は、本当に最後の最後までいろんなことが目まぐるしくあった年でした。いい年齢の私も、正直、凹んでしまうような出来事に遭遇したり。もちろん、自分に蒔いた種もたくさんあったり。さらには、突然の業務縮小となったり・・・もちろん、今後の3階ラボについても、法人と何度も話し合いを行なってきましたし、今後も行っていかなければならないのですが、私自身も、この状況を今後も継続していくことは、おそらく困難だということは、漠然とではありますが理解しています。さらなる業務縮小も必要となりますし、そうなると、業態変更も必要となります。これまでも、地域の専門職の集まりを始めたり、運営支援を始めたりと、将来の3階ラボの行く末を考えながら取り組んできましたが、その勢いを加速しなければならないようです。さらに、年始早々、筑紫地区の就労支援を担ってきた大物(?)スタッフが辞められるという情報も入ってきました。また、この地区に大きな変化をもたらすような動きもみられています。そのようなめまぐるしい動きのなかで、私や、私の所属する法人が、今後どのように荒波を乗り切っていくのか?これは、あくまで個人的な考えですが、周囲にばかり目をやっている場合ではないとも感じています。まずは、法人の足元から。デンマークに2回視察に行かせてもらった私は、そういった意味で、法人に恩返しをする時期に入っているのかもしれない。後厄である今年、私は内に籠ります(笑)。これは運命です。そのなかで、今後の3階ラボの将来と私の将来を考えていくことにします。

3階ラボは、引き続き、新規の受付を行う予定はありません。ですので、ご依頼につきましては、他の計画相談事業所へのおつなぎをサポートさせていただいています。また、現在、3階ラボと契約を行なっている方につきましても、希望される方につきましては、他の事業所へのおつなぎもさせていただいています。これを機に変わりたいと考えている方は、ご遠慮なくお伝えただけなら幸いです。

年末、特定相談支援事業所を主体とする、大掛かりな不正受給事件が福岡でおきました。福祉の悪い部分は、すべて福岡からはじまるといっても過言ではありません。私も、法人の事業として「運営支援」を行なっています。このような事件をみると、いつ私の身に起きてもおかしくないなと感じます。福祉は「性善説」「良心」で行われるものだと思います。福祉で金儲けなんてできると思わないでいただきたいです。福祉は、人の信頼の上で成り立つものです。知識もない、できもしないひとが簡単に始めるものではありません。私も、専門職として、断固として不正行為には戦いたいと思います。

LABONIEK![ラボに行く!] 福祉利用計画作成室 3階ラボ 機関紙 文・写真:寺川 直一(3階ラボ 管理者)

※無断転載はお断りします。書かれている内容は、作成者の個人的な見解が多く含まれており、3階ラボの運営法人ならびにスタッフの総意ではありません。地域の福祉がより良い方向に進むように、多くのおみなさまの事業所ならびに利用者さんとともに考えていきたいと思っています。ご意見・ご感想を是非、お聞かせください。

電話/FAX 092-408-8373 Mail: 3flabo@gmail.com